

「恐れるな、小さい群れよ」

ルカによる福音書 12章 22節～34節

説教 久保田拓志伝道師

「恐れるな、小さい群れよ。」(32節)という言葉の中に、主イエスのあふれるような愛情と深い深い思いがあふれているようです。恐れるな、というのは、恐れる理由がないということでしょう。あなた方が恐れているものは、食物のこと、着るもののことではないかとイエス様は指摘されます。それは生活が脅かされることへの恐れ、健康で落ち着いた暮らしができなくなることへの恐れです。さらには、私という人間の人生が、いつ、どこで、どんな終わりを迎えるのかわからないことへの恐れ、すなわち、死への恐れです。

しかし、主イエスは、あくせくするな、気をつかうなどと語られます。同じルカによる福音書10章39節以下には、マルタとマリヤの物語が出てまいります。主イエスを我が家にお迎えし、大事な客人をもてなすために色々と気を配り、忙しさの中で、いらだつ姉マルタと、主イエスの足元にすわってじっとその言葉に耳を傾ける妹のマリヤ。マリヤは良いほうを選んだ、それをとりあげてはならないと、マルタをさす主イエスのお姿があります。私たちの中には、日常の忙しさの中でマルタがいつも住んでいます。そして、そこにも主イエスの恵みが注がれており、マリヤの姿へと、私たちもまた招かれています。

「恐れるな、小さい群れよ。」と主は、今日も私たちに語りかけてこられます。ただ、この御言葉と向き合っておられる皆さんの中には、自分を群れの一員として扱われることに抵抗を感じる方もおられるかもしれません。私は、その他大勢の中の一人ではない。この私の声を聴きあげてください、と祈りたくなのです。

しかし、神様はあなたという一人の人間に向かって、こう語りかけるのです。「恐れるな、小さい群れよ。御国を下さることは、あなたがたの父のみこころなのである。」と。御心とは、神のご意志、決断のことです。御国をわたしたちに下さることは、すでに決定された、神のご意志なのだと言葉は主イエスはお語りになります。イエス・キリストの十字架の死とそのご復活を通して、罪ゆるされた者たちが、そのままの姿で、神の子とされ、御国を与えていただける。それが、神の義、神の真実ということなのです。

なぜ、神様は罪のない神の独り子、イエス・キリストを十字架にかけてまで、私たちに神の国を与えようとしてくださっているのか。それは、神の国、神の正義と愛とが満ちあふれている世界こそが、私たちが出てきた場所であり、

帰るべきふるさとだからです。そこは、私たちが本来の姿に戻るところであり、神に愛された宝として、罪と死の力から解放された本来の私たちの姿が光り輝く場所です。礼拝の場とは、そのような場です。

有名な放蕩息子のたとえ話で、父のもとで忠実に仕えてきた兄は、弟の帰還を祝う宴会に怒って出ようとしませんでした。喜びの輪に入ることを拒んだのです。しかし、父はその兄に伝えました「子よ、あなたはいつも私と一緒にいるし、わたしのものはすべてあなたのものだ」と。主イエスは、頑なな兄の心にも語りかけるお方です。救いの喜びの輪には、あらゆる人が招かれています。

救いの喜びは自分一人のうちに閉じ込めておくわけにはいかないのです。その喜びとは周囲の人々を包み込む喜びです。そこには、傷ついた人、疲れた人の癒しと安らぎの居場所がある、そんな喜びの輪がある。それが教会の姿です。

確かに、私たちの信仰は薄いかもしれませんが。しかし、その薄さは、ただそこで、絶望のうちに終わるものではありません。ご復活の主によって盗人も近寄らず、虫も食い破らない天の扉が私たちに向かって今日もまた、開かれているからです。主はこう言われました。「あなたがたの宝のある所には、心もあるからである。」(34節)

私たちの心という袋の中に、恐れや不安に変えて、永遠に朽ちることのない神様からいただく宝を、尽きることのない命の喜びをたくわえたいと思います。私たちの心がどんな状態であっても、イエス様が常におられ、「恐れるな、小さい群れよ。御国を下さることは、あなたがたの父のみこころなのである。」と約束の言葉を語ってくださいます。どんなに小さな群れであっても、そこに、御国がきてくださる、それが、クリスマスの到来です。そして、私という人間が、どれほど無力な状態にあったとしても、与えられた永遠の命の喜びを隣人とわかちあう時、また、私たちの中にいるマルタや放蕩息子の兄とも、その喜びを分かち合う時、そこに天に宝を積む人生が開かれています。

「恐れるな、小さな群れよ。」喜びの群れの一員として、共に支え合い祈り合う一週間へと今日からまた、踏みだしていきたいと願います。

(記 久保田拓志)